「延辺地域における民族意識・その地政学的研究のための予備考察」 鈴木貞美・劉建輝編『近代東アジアにおける鍵概念: 民族・国家・民族主義』 (中山大学・国際日本文化研究センター共催国際シンポジウム(2009) 報告書)国際日本文化研究センター 2011年3月31日 13-26頁

近代東アジアにおける鍵概念 ——民族、国家、民族主義——

中山大学・国際日本文化研究センター共催 国際シンポジウム報告書

鈴木 貞美・劉 建輝 編

国際日本文化研究センター

2011年3月

目次

民謡の収集をめぐって――概念史研究の立場から 鈴木 貞美(国際日本文化研究センター)	1
解释一词既是作一部文化史 桑 兵 (中山大学)	9
延辺地域における民族意識・その地政学的研究のための予備考察 稲賀 繁美 (国際日本文化研究センター)	13
東アジアにおける犠牲者意識のナショナリズムと歴史の和解 林 志弦 (国際日本文化研究センター/漢陽大学校)	27
1930年代における日本文壇の民族・国民・「日本精神」問題 — 雑誌『文学界』『新潮』『日本評論』『文芸』等の言説をめぐって 増田 周子(関西大学)	39
"民族": 从理论概念到实践工具——1980年代贵州东南部乡村民族意识的发展 張 応強(中山大学)	55
民族中的社会与社会中的民族——费孝通先生的民族观 麻 国慶(中山大学)	59
野口米次郎・タゴール論争――第二次世界大戦期の民族主義一側面 堀 まどか (元総合研究大学院大学 院生)	69
中国亲属制度研究的周边视角——少数群体与家谱 王 建新(中山大学)	85
"清真":常识与解释——以对呼和浩特市回民区通道街的调查为例 張 亮(中山大学博士生)	99
映画における '民族' 概念形成——自衛隊協力映画の考察 須藤 遙子 (玉川大学 非常勤講師)	123

延辺地域における民族意識・その地政学的研究のための予備考察

稲賀 繁美 (国際日本文化研究センター)

近代東アジアにおける文化交流を考える場合、中国東北部の東端に位置し、北には旧ソ連・ロシアに接し、東には北朝鮮に接する延辺地域は、特異な意義を担っている。まずこの地域は朝鮮族が人口の過半を占めてきた地域であり、現在でも中国語と朝鮮語が併用されている。またその地域的な特性ゆえに、戦前期より国際的にも地政学的な拠点となっていた。すなわち、南下を図るロシア・ソ連と、それを阻止しつつ朝鮮半島での権益を確保しようとした日本、さらには東北地方へと進出する漢民族の利害が重なるばかりか、とりわけ朝鮮族にとっては、金日成のゲリラ活動に象徴されるように、朝鮮・韓民族独立運動の基点としての意味も担ったからである。こうした政治上・地勢学上の要所において、戦前期・戦中期に、とりわけ日本による教育がいかなる文化変容をもたらしたか、そしてそれが現在に至るまで、地域にいかなる影響を与えているのかを比較文化史・文化交流史的な見地から調査することを目的として2009年夏に延辺地域で短期間の調査を行った(註1)。ここにその成果を手短に報告する。

1

延辺地区は、かつては間島とも呼ばれたが、その南方には、朝鮮語の白頭山、中国語の長白山が存在する。この休火山は、朝鮮族にとって民族的崇拝の象徴であったばかりか、満洲族にとっても祖先の発祥地として聖地の扱いを受けてきた、という事情も加わる。現在では山頂のカルデラ湖、天池の中央が、中・朝国境となって直線で分割されているが、この線引きには、日本支配が関与している。すなわち、日韓併合に先立つ1907年に、齊藤季次郎中佐率いる工作部隊とともに龍井村に潜入した篠田治策(1872-1946)は、統監府間島派出所開設にあたり、総務課長に任命されているが、かれは国際法学者として、のちに「間島問題」を回顧し『白頭山定界碑』(楽浪書院、1938年)ほかを刊行している。平壌勤務を経て、李王職次官、長官を歴任した篠田は、「間島問題」の専門家であり、追って京城大学第9代総長を務めた(1940-45)。この篠田の著作は、今日では韓国の一部の識者によって、間島を韓国領土とみなす主張の根拠にも利用されている(李建志氏の教示)。これに対して、北京政府側には、今日「間島」の呼称そのものを忌避する傾向も見られる(劉建輝氏の教示)。ちなみに、この長白山一帯は、満洲事変(1931年9月18日)に端を発する、偽「満洲国」建国(1932年3月1日、建国宣言)後の1936年頃には、民

間航空機による遊覧飛行の対象となっており、満洲航空その他の定期航空路やその 旅客運賃の詳細も、当時の史料から復元できる(稲賀襄遺品にみられる航空写真)。 だがこのような航路の存在は、今まで、朝鮮・中国の専門家にもほとんど知られて いなかった。こうした日本支配時代の事実が、その後長らく埋もれてきたことも、 今回の現地調査による聴き取りから、あらためて確認された。

2

また延辺東端の防山地区は、地政学的にも重大な意味を担っていた。そのこと は、中国国境の東側をなす図們江河口にある防山の間近に張鼓峰が位置しているこ とからも理解できる。いわゆる張鼓峰事件(1938年7-8月)は、ソ連側ではハサン 湖事件と呼ばれるが、ソ連軍と日本軍とがこの地で衝突した事件である。それは 1937年7月7日の盧溝橋事件をきっかけとする日中戦争勃発に続く時期の事件であ り、39年5月11日からの通称ノモンハン事件の前哨ともいえる。地図で確認すれば 明らかなように、ノモンハンがいわゆる満蒙、すなわち満洲国に取り込まれた内モ ンゴル地域の西の外延における、国境紛争であったなら(田中克彦『ノモンハン戦 争』2009年、75頁)、張鼓峰事件は、朝鮮族が多数を占める満洲国東端の、ソ連と の国境地帯で発生した武力衝突だった。いわゆる第二次上海事変(1937年8月13日) 勃発の時点で、大日本雄弁会講談社の月刊雑誌『キング』には、多色印刷による、 当時の少年向けの付録地図が、折り込みで添えられている。これを見ると、東端を 張鼓峰、西端をノモンハンとして、その間に北にむかって巨大な円弧を描く黒龍江 に沿った満洲国国境の外側には、赤軍の駐屯状況が絵図で克明に示されている。こ こには、「小国民 | 読者に北からの脅威を実感させようとする編集意図が、如実に 窺われる。

アイグン条約(1856)、北京条約(1861)により沿海州はロシア領となっていたが、そのなかで、現在の中国領土は、図們江北岸に貼り付くようにして、東へと細長く尾を伸ばし、あと15キロほどで日本海に出る地点で、北にはロシア国境、南には北朝鮮国境に挟まれて、途切れている。その突端に位置する防川の軍事地域は、ロシア・北朝鮮そして中国の3国の国境が接する場所であり、中国国境の数百メートル先には、ロシアと北朝鮮とをつなぐ鉄道橋が川を横切っている。日本敗戦後、中華人民共和国が成立して60年を経過した今日なお、中国にとっては、ここが沿海州・日本海に繋がる唯一可能な出口であり、とりわけ改革開放政策が活発化した1990年代初頭、中国は国連開発計画(UNDP)重点事業の決定を追い風に、図們江河口へのアクセスを獲得しようと働きかけた。しかしこれには対ロシアとの国境画定問題が絡まっていたうえに、1992年の中・韓国交回復により中朝関係が冷却化し、北朝鮮側はこの地域の開発に消極的となった、といわれる。とはいえ、北朝鮮側としてみれば、中国に沿海州への港を与えることは、中国の領土獲得意欲を煽る

愚を犯すばかりか、自国の経済利益にも損失を与えかねまい。むしろ北朝鮮領内を経由させることで、中国からの物流に北朝鮮側の港を利用させ、関税収入を得るほうが得策、との判断があったことだろう。中国側には立派な物資運搬路が完成しているが、北朝鮮との交易は決して盛んといえる状況にはない。また北朝鮮とロシアを結ぶ橋にも、列車が頻繁に行き交う風情はみられなかった。防川はもっぱら中国側のみの国境観光地と化しており、江沢民の碑文を頂いた招聘所と展望台ができているが、対岸の北朝鮮側には人家も、耕作地も見当たらず、自然林が広がるばかり。軍事地域入り口から展望台へは車で10分ほどの距離だが、暫く進んだ場所には、小規模な張鼓峰記念館とともに、清朝の光緒帝の時代の地方長官で、文人・書家として著名な吴大澂(1835-1902)の巨大な石造が作られており、「竜虎」の筆跡ある碑文に右手を突いて、川を隔てた朝鮮側を見下ろすように睨んでいる。彼は図們江に中国船の航行を認めさせた功績が知られるが、その巨像が、あえてロシア側からは視認できぬ位置に据えられているのも、意味深長といってよい。

3

この図們江開発には、日本企業も数社進出したという。その背景には、朝鮮系を中心として日本語に堪能な人材が豊富にあり、これを積極的に活用しようとの意図があった。だが開発計画が掛け声倒れのまま停滞するなか、延吉大学でも、語学教育における日本語の比重は、近年軽くなり、かわって英語習得を希望する学生が増加している。人口動態を見ても、現地の朝鮮系の若者は、韓国あるいは日本、さらには近年では英語圏へと出稼ぎに出るのが夢であり、海外で儲けた金で故郷に錦を飾る志向が強い。実際、現在50万を超える人口を擁する延吉市の郊外には、大規模なマンションの建設がラッシュを迎え、新市街が形成されようとしていた。そしてその労働力不足を補うように漢族が流入しており、現状では朝鮮族が人口の6割弱を占めるこの政治・経済上の地域中心都市でも、漢族の人口比率がじりじりと高まっている。周辺を含めた延辺朝鮮族自治区全体では、総人口220万のうち、漢族が59%、朝鮮族が38%という統計が報告されている。

日本語教育の経緯と現状について、さらに詳しく見ておこう。延辺州内で中学校・高校教育に外国語科目が復活されたのは、文化大革命終息後の1978年のことであり、それ以来、州内すべての朝鮮族中学校・高校では日本語が第一外国語としてカリキュラムに組み入れられた(以下、延辺大学外国語学院日本語学部・孫雪梅教授よりの教示)。延辺以外の吉林省、黒龍江省、遼寧省でも朝鮮族中学校・高校では日本語を第一外国語とする学校が大多数であったという。このため大学への進学者も、日本語基礎知識をすでに身に付けた高水準の学生からなり、日本語学部は人気学部として多くの応募者を集めた。卒業生も日本語教師として良好な就職状況にあった。

だが80年代後半から英語学習者が増加し、90年代を迎えると「英語一辺倒」という状況を呈する。90年から2001年までの統計を見ると、延辺州内大学受験者のうち、日本語学習者の率は90年の90.3%から、2002年には61.8%まで低下した。これに伴い中学校・高校での日本語教師の需要も激減し、卒業生の就職難も顕在化する。これが先に述べた「出稼ぎ」を助長することとなり、延辺地域の朝鮮族の人材流出に繋がった、という。あわせて日本語初心者コースを新設する必要も生じ、学生の適性に応じた複式授業が導入されたため、結果的に教育的効果も低下を余儀なくされた。とはいえ、教員のレベルでは、2005年以降、人材流出には歯止めがかかっており、19名の在職者のうち博士学位取得者が5名を数えるという。

以上のリポートは、あくまで日本語学科の内部資料に基づく報告であり、これは 延辺朝鮮自治区における朝鮮族の置かれた状況全般のなかで解釈される必要がある だろう。いうまでもなく、朝鮮族の出身者にとって、公用語の中国語を別とすれ ば、一番習得の容易な言語は日本語に他ならない。中国語を母語とする漢族にくら べて、日本語習得の容易さは比較になるまい。だが90年代を迎えて第二外国語教育 に「英語一辺倒」の傾向が現れたのは、中国沿海部の一般的傾向に乗じたことに加 えて、中国と韓国との国交回復の影響があったもの、とみるべきではないだろう か。基本的に中国語での意思疎通にさしたる困難を感じない朝鮮族出身者にとって (とはいえ、ある程度以上の社会的地位に相応しい水準の中国語を習得するのは、 けっして容易ではない、と多くの朝鮮族大学関係者ほかからの証言を得た)、韓国 系企業への就職が有利となれば、ソウルや上海、北京などの出稼ぎ先で、次に就職 上有利な外国語知識は、もはや日本語ではなく、英語となる。黄海に迫り出した遼 東半島の先端に位置する大連地域では、80年代後半から日本企業との提携が急速に 促進された。それとは対照的に、日本海に面する図們江開発が事実上頓挫したこと も、延辺地域での日本語教育の不振を、間接的に助長した要因のひとつ、といえる だろうか。

4

だが、ここまで延辺地域の文化状況を俯瞰してみると、そこに戦前の日本支配が落とす影を見ないわけにはゆくまい。日本語教育に限っても、延辺大学で文革終息後の70年代末に授業を担当した人たちは、戦前に日本語教育を受けた、当時50代半ばの朝鮮族によって占められていた。それ以前の人民中国建国期を見ても、地元で日本語による高等教育を受けた人材が、教育界のみならず、様々な分野に進出した様子が窺える。そうした経緯を窺う格好の資料のひとつが、当時の中学校の同窓会名簿だろう。満洲国時代に日本の総領事館の置かれた近隣の龍井にあった光明中学校の同窓会会員名簿(1989年版、および98年版の復刻)を拝見したが、89年版の光明中学恩師として名前のある国内在住者には、石熙満(当時75歳、元・延辺藝術大

学校・副学長)、朴奎ψ(当時71歳、元・延辺大学・校長)の名前が見える。石先生は、延辺大学・日中韓語言文化研究所の現所長、李東哲さんの父君にあたるという。また、この段階でまだ退職していない光明中学校出身の男性会員のほとんどが、教職あるいは大学病院、出版関係ないし行政の要職についており、それ以外の海外会員(ほぼ半数以上)の多くがソウルを中心として、韓国に在住している。

一方、光明高等女学校は1930年3月に第1回卒業生を出しており、同校の関係者としては、今回、延吉在住の K.H.さん(1928年生、1945年、1989年名簿では第15回生、1998年名簿では第17回生、元・延辺百貨公司科長、日本名は金岩松子)と、K.M.さん(1929年生、1946年12月卒業、1989年名簿では第16回、1998年名簿では第18回、元・延辺人民広播台・広播員)のおふたりから、ゆっくりとお話を伺う機会を得た。同学年の会員の大多数がソウルあるいは釜山に在住し、何人かが北米に在住している。89年と98年の名簿の住所異動を見れば容易に推察できるように、これは90年代に子弟が韓国や北米に住居を構え、それに頼って移住したもののようである。光明高等女学校は1945年の日本敗戦とともに統廃合されたため、46年卒業生が最後となる。一般に女子の場合にも、医師、教員、会計士などの職についた割合が著しい。もっともこれが仇となって、文化大革命期には、男女を問わず、日本の教育を受けた多くの同級生が、反革命知識分子として紅衛兵から吊るし上げられた、との経験談も複数の方々から伺った。

K.M.さんの場合には、50年代に北京の放送局勤務となり、アナウンサーとして日本語放送の企画にも参画している。日本支配下で習得した日本語の知識が職業上に生かされ、経歴の基礎となったわけだが、その一方、北京に出てみると、自分の中国語が不十分なことに気づかされ、普通話の習得のためにずいぶんと苦労した、とも語っておられた。また K.H.さんともども、中学時代はなつかしく、たいへん愛着があるものの、そうした少女時代のことを語らせてもらえる機会がなく、子供たちの世代に証言を残せない侘しさを感じてきたことも、正直に告白された。

これは龍井の光明中学校を卒業した、K.G.さん(現在79歳、漢族、現・龍井居住)の体験とも重なる。1943年、小学校5年生のときに、選ばれて山本五十六の戦死を弔うべく、日本内地に派遣される児童代表のひとりに選抜された彼は、旅順戦跡までは足を伸ばしたが、当時すでに対馬海峡の船舶航行が危険となっており、日本への派遣が中止となり、故郷に引き返した経験をもつ。だがこのとき旅順で建国忠霊廟春期大会に参加した履歴が発覚して、紅衛兵から反革命分子として糾弾された。それにもかかわらず、Kさんは、中学の同窓会名簿、『一光会会報』創刊号(康徳10年=昭和18年=1943年)を今日まで手放さず所有していた。これは300頁近い冊子である。また自らも長らく教職にあったK先生は、龍井東山小学校の4年担任(1942年)だった山崎初子先生への思慕が断ち切れず、文革のあと、昭和54年になって、恩師の消息を探ったが、福岡県の役所からは、現住所変更、本籍地不明のため、追跡不可能との手紙が戻ってきた(6月28日付)。その小学校時代の記念写真

も、文革の嵐を生き延びて、今日まで大切に保管されていた。

5

このように書くと、あたかも延辺では日本による支配が歓迎されていたかの印象 を与えかねない。だが当時の間島省は、抗日活動が盛んなことで有名な地域だっ た。龍井第四中学校には、旧・私立・大成中学校の建物が保存されており、記念館 となっている。展示はふたつにわかれる。まず、かつての校舎は、「龍井中学歴史 展覧館 | として、延辺地区の教育史を展示している。言うまでもないことだが、日 本支配下の教育に関する部分は削除され、いかに侵略者に対する抵抗運動がなされ てきたかの歴史が、教育すべき正史として示されている。とりわけ間島で少年時代 を過ごし、龍井の恩真中学に在籍した、夭折の詩人、尹東柱(1917-1945)は大き く扱われ、記念館の前に石碑も置かれている。よく知られるように、光明中学校を 経て、平壌の崇実中学校に移り、さらにソウルの延禧専門学校(現在の延世大学 校) 文科を経て、1942年立教大学英文科選科に入学し、同年京都の同志社大学に 移った尹東柱は、ここで治安維持法違反の容疑で逮捕され、45年12月16日に福岡刑 務所で獄死する。没後、愛国詩人として評価された彼の詩集『空と風と星の詩』か らは、筑摩書房の高校国語教科書『新編現代文』にも日本語に翻訳された作品が取 られている。この教科書は、同志社大学に詩人の記念碑が建立されるのにちなんで 発刊された『星うたう詩人―尹東柱の詩と研究』(三五館、1997)とともに陳列 ケースに収められていた。

第2部は新設の建物で、ここでは李相卨 Yi Sangseol(1870-1917)の事跡を記念し ている。李は瑞甸書塾を龍井に開いたが、一般にはいわゆる「ハーグ密使事件」 (中国語では海牙事件、1906年)で国際会議場開催地に乗り込み、韓日協約の無効 を欧米に訴えた中心人物として有名だろう。会場には「韓日脅約」と題した戯画を 含め、参考資料が展示され、李の愛国者としての活躍が描かれている。これらふた つの資料館は韓国の資金援助により開設されたとのことで、韓国からの団体旅行客 が次々に訪れては、朝鮮語の説明に耳を傾け、出口に用意された寄付金名目の芳名 帳に競うように記名してゆく。これらふたつの展示は、ともに朝鮮民主主義人民共 和国、大韓民国そして中華人民共和国の政治的利害の微妙な一致点に焦点を絞っ て、抗日革命運動史を描き出す。1992年の中国との国交回復以前の韓国では考えも 及ばなかった事態だが、今では「抗日」を合言葉にすれば、共産党革命イデオロ ギーに沿った展示にすら、積極的な資金援助を厭わない風潮が、韓国側に醸成され ていることになる。仄聞するところでは、こうした韓国側のいささか過熱気味の民 族ナショナリズムには、延辺朝鮮族自治区側の朝鮮族の識者の一部からは、かえっ て敬遠したいような、戸惑い交じりの違和感が遠慮がちに漏らされる折節もある、 とのことだった。

これらの展示もまた、龍井という土地の特異性を際立たせる。というのも、先に 触れた篠田治策はハーグ事件にも間接的に関与することになるからだ。李王職に就 いた篠田は、最後の皇太子、李垠の引率役として1927年から、その外遊に随行す る。その記録が『欧州巡遊随行日記』(大阪屋号書店、1928)として公刊されてい る。これとは別に、おそらく李王職で編纂したと推定される『李王同妃殿下御渡欧 日誌』が存在している。李建志氏も指摘するように、後者に見える記述のうちのい くつかが、前者からは意図的に削除されている。そのひとつが、当然のことなが ら、10月25、26日のハーグ平和会議場見学に関わる部分である。いうまでもなく、 篠田による公刊記録には「ハーグ密使事件」への言及は一切みられない。それどこ ろか篠田は、前述の『白頭山定界碑』で李のことを「不逞鮮人」の代表として言及 している。李相卨と篠田治策とは、ほぼ同世代人であり、双方とも国際社会におけ る朝鮮あるいは大韓帝国の地位の認知に関わった。そのふたりの活動の出発点が、 奇しくも日露戦争直後の龍井であった。だがそれがけっして単なる偶然ではなく、 地政学的な必然をも秘めていたことは、すでにここまでの記述から明らかだろう。 記念館の売店では朴青山編『延辺抗日革命史迹地』(延辺人民出版社、2002)が販 売されていた。ハングルによるこの著作には、李相卨の事跡は詳細に記述されてい るが、そこには間島派出所初代領事の下で勤務した篠田の名前は見られない。ちな みに京城大学学長を務めた篠田の文書は、現在では北米のスタンフォード大学に一 括して保存されている、という(李建志氏の教示)。

6

さて、筆者が今回、龍井地域の現地調査を思いたったそもそもの理由は、きわめて個人的なものである。筆者の祖父、稲賀襄は1943年9月1日付けで、龍井高等女学校に赴任した。それまで存在した光明女学校と併合し、これを龍井女子国民高等学校へと改組し、これに並んで、間島女子師道学校を立ち上げるのが、その主たる業務だった。だが日誌を見ると、着任早々から自分の任期は1年2ヶ月と決め、健康上の不如意を理由あるいは口実として、早々に離任手続きを取る決意をしていた。そして、離任予定日当日の、1944年11月12日朝に、朝礼で別れの挨拶をする直前、宿舎の前の庭石に腰を下ろしたまま、心臓発作ないし脳溢血のため、急逝した。その祖父の故地を訪ね、祖父の置かれていた状況をいささかなりとも理解したい、と願っての旅だった。

幸い、今回の一週間足らずの調査で、襄が作詞・作曲した龍井女子国民高等学校の校歌の曲を採録することができた。先に触れた K.M.さんが、歌詞を見てただちに曲を思い出し、歌って聞かせてくださったからである。それとともに、光明高等女学校の校舎の写真も、同窓会名簿に掲載されたものを複写することができた。さらに驚くべきことには、これも襄が作詞・作曲したものと思しい、寄宿学寮の歌も

発掘できた。これまたKさんが、インタビューの席上で不意に思い出してくださったものだった。加えて、前身である光明高等学校時代の校歌も、ハルモニは歌詞を手帳に書き込んでおられ、2日後、別れの宴の席で節もつけて、この歌も唱って聞かせてくださった。

これらの歌詞の詳しい分析にはまた場所を改めたい(註2)が、校歌は「あまてる神の宮居のほとり/丘べの森に立てる学園(まなびや)/朝夕(あしたゆうべ)に仕へまつりて/瑞垣のうちなる我らが幸」と始まる。2番と4番に計2箇所現れる「皇国」を「中国」に改めさえすれば「光復」後にも立派に通用する歌詞であると見ても、必ずしも身内の身びいきとばかりは言えまい。とりわけ寄宿寮の歌には、政治的な含意はほとんど読み取りようがない。「感謝の夜明けだお掃除だ/おいしいご飯を作りましょう/室はわが家・寮は村/家を明るくいたしましょう/今日も皆で朗らかに/村を明るくいたしましょう」。政治性を表面的に払拭した歌詞は、それだけに却って罪作りだとする解釈は容易だろうが、当時十代後半の女子生徒の記憶に、それらの歌詞がいまなお刻まれ、文化大革命の試練を越えても、なお保存されている例のあることに、むしろ畏怖を抱くべきかもしれない。よきにつけ悪しきにつけ、教育のおそろしいまでの効能がここに見られるからである。

7

当時の龍井はきわめて教育水準の高い土地だった。そして高等女学校に入学することは、今日の一流大学に入学するよりも、人口比率でいえば、はるかに狭き門だったという。それでも当時、龍井女子国民高等学校には、700名にのぼる英才が集っていた。こうした勉学環境がなければ、おそらく農民として一生を送ったであろう何人もの人々が、才能を開花させ、その後まったく異なった人生行路を歩み、地域にそして新生中国の未来に別様の貢献をすることとなった。日本支配下での教育の得失や政治的な善悪には、いまあえて踏み込むまい。襄は辞職に先立って、個人の日記に「今の様なそそっかしい四角四面なやりにくい時に、私の健康と性格はぴったりこない」と、健康面の不安と、時局への違和感を私的に表明し、「まるで出来ていない若い人達が査察とか何とかやって来たり、作った許りの学校を動かそうとするような、まるで目標のない行政の下に、真剣に良心的な教育は行えない」(日誌、昭和19年7月11日)と、教育に対する理不尽な統制や口出しに不満を述べていた。とはいえこの人物を、そうした心情ゆえに、植民地教育者としての責任から免責しようとは思わない。

その祖父は、急逝する直前の日誌に、龍井女高を去るに際して、「事務引継ぎを終わりて」と記したのちに、手製の和歌を十首書き付けていた(11月10日)。日本人校長の思いがけぬ死去により急遽執り行われた学校葬に際して、それらの歌が印刷に付され、参列者に配布された。

そこには、所詮素人の駄作ながら、以下のような歌がみえる。それを順不同に取り上げる。

お茶くみに書類はこびに叱りてし子らの思ひ出皆なつかしき 入学の掲示にもれて泣きやまぬ乙女ありしがいかにしつらん 卒業のめでたき庭に咽ぶ子の乙女ごころもいとしかりけり

襄の遺品には、康徳11年すなわち西暦1944年の「東満総省立龍井女子国民高等学校新入生合格者名簿」というガリ版刷りの名簿が残されており、そこには150名ほどの名前が列記されている。そして、帰去来の辞ではないが、ふるさとの田畑が荒れ、倒れた塀を修繕するために帰国すると告げた校長には、物資逼迫の時局にもかかわらず、千本に達する釘が形見として、届けられた。

千本の釘を かたみと贈りてし乙女七百 忘れ得ぬかも 子ら皆がひとりひとりに魂こめて 集めし釘ぞ我が家のため 教え子の心こもりて 今よりは 我が家の塀は動 (ゆる) ぎなからん

故郷で畑作に従事して引退後を過ごす決心には、中風を病む母への孝行という配 慮もあった。

> 畠作り倒れし塀を収めむと子らに告げつつ 学び舎を去る 年老いし母を守りて はるかなる教え子の 幸祈り暮らされ

最後には、いささか時局向きの歌が混在している。だが「天つ神」は朝鮮の天空神ハムニムであっても構わない趣向であり、それは朝鮮ではキリスト教の創造主とも同一視されていた。また大正教養主義の修養の時代に自己形成を遂げたモダン・ボーイにとっては、神とは万物の根源に位置する生命の謂であったろう。「日の本」も、そうした解釈へと開かれた語彙の選択ではなかったか。

天つ神 あきつみ神のみ恵みに 今日あることを忘るるなゆめ 床しさに強き力をつつみつつ我が日の本の礎(いしづえ)となれ

「倒れし塀」とは、ほかならぬ自らの死を暗示する言葉となったわけだが、このとき、襄、享年は数えで52歳であった。奇しくも、その祖父の没年と同年齢で終焉の地を訪れる機会を得た孫は、いまいささかなりとも、祖父の歩んだ道と、その背景を理解しはじめている自分に気づく。そして祖父の辿った生涯を、8月6日には、延辺大学本部にて「東アジア文化研究へのあらたな展望:延辺戦前教育史の視点か

ら―龍井高等女学校初代校長の生涯と足跡に照らして―」と題して講演することを許された。とはいえ、それはなにも個人的な感傷を述べるためにしたことではない。むしろ奉職する国際日本文化研究センターの共同研究活動の紹介の一環として、あらたな学術上の方法論の提案を込めて企てたことであった。

8

国際日本文化研究センターの共同研究は、国際的・学際的・総合的研究を謳っている。日本近代の経験は近隣諸国に不幸を齎すものだった。しかしだからこそ、その実態研究には国際的な協働が不可欠である。さらにそれは、言語学や狭義の日本文学研究の枠のなかでは実現しえない。延辺という複数言語文化圏は、その境界性ゆえに日本の侵略にあっても、政治的・文化的な意義を担う結果となった。その異文化接触の現場をなまなましく体現するのが、教育という制度であってみれば、そこに歴史学の知識や地政学的な分析、さらには国際政治力学の作用を読み取り、これらの学際的なアプローチを総合してはじめて、広義の植民地経営への反省を紡ぐこともできるはずである。と同時に、延辺大学も援助を受けている国際交流基金の前身が、満洲国成立以降になって結成された、国際文化振興会という外務省外郭の国策組織であったことも、また想起されてしかるべきだろう。日本が「国際文化」という名のもとに進めてきた政策は、けっして政治的なきな臭さから無縁ではない。そうした過去への眼差しは、未来への警鐘ともなるはずだ。

戦前の「王道楽土」はまやかしの美名にすぎなかった。だがそこには未経験なまま「五族協和」の壮大なる実験にとりかかり、無粋な失敗を犯した痛切な体験が、負の遺産として残されているはずだ。それを禁忌として頬かむりしたり、あるいは総括して声高に糾弾したりして能事畢れりとする代わりに、その失敗の跡を具体的に見極める努力が、「脱植民地」を謳ういまこそ求められているだろう。国際日本文化研究センターというきわめて小規模の研究所においても、この主旨にそって東アジアの近代を問い直す共同研究プロジェクトが複数進行中である。西欧近代の語彙や思想さらには社会制度がいかに漢字文化圏・儒教社会に受容され変容されたのかを、国際的な共同作業で開明しようとしている、鈴木貞美の研究班、中国東北部・旧満洲地域の文化史の問い直しと再構築を目指す、劉建輝班。その驥尾に付して、筆者はアジア概念が如何に西欧とそれ以外(the West and the rest)の相関のひとつの変数として分節されてきたかの批判的検討を試みている。

9

延辺地域での今回の現地調査は、わずか数日のきわめて小規模の初歩的作業にすぎない。だがそれが、国際的な視野に立ち、東アジアのなかでの民族意識研究を進

めるうえで、ひとつの里程票あるいは、最初の礎(「日の本の礎」)となってくれることを、筆者としては願わずにはいられない。当講演への講評で、権宇院長も正当に指摘されたとおり、文学研究とは、印刷されたテクストにのみ没入していればよいものではない。歴史人類学的な現地でのフィールドワークから、歴史資料を今に蘇らせ、その時代と社会とを浮き彫りにする行為のなかから、延辺の日本語環境の様相が、中国語や朝鮮語との鬩ぎあいのなかに、くっきりとした姿を取り結ぶことになるのだから。

あとがき

筆者が延辺大学で講演を行った2009年8月6日は、奇しくも、広島に原爆が投下されて64回目の記念日にあたっていた。襄は広島高等師範学校を卒業し、熊本に赴任したのに次いで、関東洲大連を皮切りに旅順、奉天、北京と大陸での教育に生涯を捧げた。その没後わずか9か月を待たずして、襄もよく知っていた市内相生橋たもとの産業奨励館は、爆心地の象徴たる原爆ドームへと変貌を遂げることになる。同じ町の広島高等学校に1944年に入学したその息子の敬二は、低学年生であったゆえに被災地の救助活動も早々に免除され、市外への脱出を命じられた。そのお陰で致死量の放射線被曝を免れたために、16歳の父は、辛くも生還した。そしてこの敬二が生き延びることがなかったならば、いま延辺でその息子がこうして祖父に関する講演をする機会もなかったことになる。

祖父への最低の義務を、65年後になって、祖父の終焉の地でようやく果たした。そんな安堵とともに、祖父の生きた時代を知るための努力は、いま始まったばかりなのだ、という自覚も、延辺を訪れてみて、ようやく芽生えてきた。祖父は没する前日にいたるまで、生涯に計58冊の日誌を残している。龍井での日々の出来事や所感も、一日も休まず書き留めている。それを詳しく読み直して、等身大の経験へと復元する作業は、筆者の今からの残された人生の課題のひとつとなろう。歴史的な事件という横糸のあいだに、個人の人生という縦糸を通わせて生地を仕立てる作業。それは個別の life history に普遍的な次元を授けるとともに、逆に個々の歴史的事件に、それに接した人々の感情の深みと振幅とを丹念に肉付けしてゆく作業でもある。その縦糸と横糸との織り目のなかに、歴史を生き直す、わずかな可能性も少しずつ拓けてゆくのではなかろうか。

思えばそれは、祖父や父と同郷で、山陰の堺港に生を受けた隣人、水木しげるが『コミック昭和史』で採用した手法と、なんら変わるものではない。水木しげるの祖父に、筆者の曽祖父、稲賀恵四郎は一編の漢詩を献じている。また近年文化勲章を受章して、いまや故郷の「水木ロード」でも著名なこのマンガ家の両親は、筆者の祖母・きくのと近所付き合いのある、小学校以来気心の知れた同窓生だった。幼少の日の夏休み、昼寝から眼覚めた祖母の家に、武良夫妻が次男坊のマンガ近作を

手に、ひょっこり訪ねてきた日が、昨日のことのように鮮明に思い出される。

謝辞

筆者にこうした生涯の記念となる稀なる機会を提供し、講演を主催して頂いた延辺大学日中韓語言文化研究所・所長の李東哲先生、外国語学院院長の権字先生はじめ、日語系主任の孫雪梅博士、金永洙副教授、安勇花博士、徐瑛博士ほかのすべての皆様に、あらためて御礼を申し上げる。また筆者を延辺での調査へとお誘いくださり、滞在中、文字どおり朝から晩まで付き添って手配万端を整えてくださった、新潟産業大学の金光林教授と、そのご親戚の皆様に、深い感謝の意を捧げたい。すでに病重いなか、筆者の調査の下準備を整えておいてくださった長兄、金京麟氏の急逝の悲しみのなかで、金光林さんは、筆者の調査を手助けしてくださった。その恩誼には応えるべき言葉を知らない。また著者のインタビューに快く賛同され、聞き書きの公表にも同意された、Q.G.、K.H.、K.M. 各位をはじめ、金光林さんのご親族の皆様、さらに録音の手助けをしてくださった、UCLA 社会学教室博士課程学生の金載恩さんにも、篤く御礼申し上げたい。

(註1) 以下に調査の日程を記す。

- ◆調査遂行者:稲賀繁美 国際日本文化研究センター教授
- ◆目的:中国・延辺地区における近代東アジア文化交流と知的システムの再編成に関する調査 (日本支配下における教育史の制度調査、体験者への聴き取り、地勢史的状況調査)
- ◆期日:2009年8月4日~9日
- ◆日程:8月4日 青島経由延吉空港着、延吉大学外国語学院及び語言文化研究所関係者と懇談5日 龍井視察(同行・金光林・新潟産業大学教授、権宇・延辺大学外国語学院長)。聴き取り調査:Q.G.(龍井第一中学校卒業生)、金銀順、金花。訪問地:龍井市人民政府(旧・間島省庁舎、日本総領事館)旧・龍井駅、龍井第四中学校(旧・光明女学校、龍井高等女学校)、龍井第四中学校記念館(旧・私立・大成中学校:尹東柱記念碑、李相高Yi Sangseol記念室)、同地区諸中学校「聯合記念碑」
 - 6日 午前:延辺で聴き取り調査:旧・龍井高等女学校卒業生 G.H. (15回生)、K.M. (16回生)通訳:金光林、録音:金載恩(龍井高等女学校校歌、寮歌はか採録)。午後:延辺大学本部にて講演(主催:延辺大学外国語学院+語言文化研究所「東アジア文化研究へのあらたな展望:延辺戦前教育史の視点から―龍井高等女学校初代校長の生涯と足跡に照らして―」)および国際日本文化研究センターの活動紹介
 - 7日 長白山視察 (1936年航空機による撮影写真が、稲賀襄遺品に存在)
 - 8日 防山:ロシア・朝鮮・中国・国境地帯、図們:朝鮮国境視察。延辺に戻り、再度聴き取り:K.M.(光明中学校の校歌ほか確認)
 - 9日 北京経由にて帰国
- ◆滞在先:羅京賓館(延吉市内)
- (註2) 稲賀「移民状況の中の『歌』の記憶」日本音楽表現学会[編]『音楽表現学のフィールド』東京堂出版、2011年、10-21頁。
- * 本研究は「鈴木貞美科学研究費助成金、東アジアにおける文化交流と知的システムの近代 的再編成」の成果の一部である。なお、ほぼ同一の文章がその後、『日文研』46号、2011年3 月末刊行、に再掲される予定となったことを付記する。



図1 「白頭山附近略図」篠田治策 『白頭山定界碑』1938年



図2 防川附近略地形図(現在、中華人 民共和国で市販の地図より作図)



図3 白頭山定界碑



図4 呉大澂石造碑(防川国境地区) (2009年夏撮影)



図5 「日韓脅約」の批判記事、同時代の 朝鮮語新聞より



図6 龍井女子国民高等学校での農作業風景 (1943年秋) (稲賀襄旧蔵)

近代東アジアにおける鍵概念 ――民族、国家、民族主義――

中山大学・国際日本文化研究センター共催 国際シンポジウム報告書

非壳品

発行日 2011年3月31日

編 集 鈴木貞美·劉建輝

発 行 国際日本文化研究センター 京都市西京区御陵大枝山町3-2

〒610-1192 電話 075-335-2222

印 刷 日本写真印刷株式会社